
ONEPIECE 白髪の男

すねえく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONEPIECE 白髪の男

【コード】

N8883Z

【作者名】

すねえく

【あらすじ】

空き缶を踏んで転び、不良に追いかけられ、トラックに撥ねられ
．
．
死んだ俺は胡散臭い髭オヤジの目の前にいた
よく分からないままONEPIECEの世界に飛ばされて．．．
なんだかんだで海に出ました

序章

真っ白

そう、俺の目の前に広がるのは都会のコンクリートジャングルじゃないといけなはずだった

だが、俺が目覚ますと目の前に広がるのは真っ白な何も無い空間有り得ない、ちよつと待て

俺は確かただの高校生だったはずだ、昨日だって空き缶をふんずけてこけて、何かぶつかつた感触がしたと思つたら目の前には強面の不良さんがいて、相手が1人だから余裕こいてたら何処からともなく不良が出てきて、逃走を開始、前を見るのを忘れていたので当然信号が赤になつたことなど分かるわけもなく、大型トラックに跳ね飛ばされ意識を失うといつた、異常ただの高校生

・・・あれ、俺死んでない？

死んでるよね、流石に大型トラックに跳ね飛ばされたら確実に死ぬ流石にってのは気にすんな、俺は少しタフだったってことだ

だとしたらここはどこだ？俺が死んだんならきつと天国に連れて行かれるはずなんだが

まあよくある話だと俺の目の前に胡散臭い髭親父が出てきて「わしは神じゃ」とか言っただろうな

直後

俺の目の前に胡散臭い髭親父が出てきて

「わしは神じゃ」

とか言いやがった

「・・・うわぁ」

うわぁ、

まさにうわぁである

そうだ、きつと夢なんだ、ほら、もう少しで消毒液の香りがする病室のベッドの上にいるに違いない

「うわあってなんじゃ、わしは神、お前人間、OK？」

「俺人間、お前変態、OK？」

「生まれてこの方神様に変態などと言った輩は初めて見た」

「それはそうと神様、ここってどこよ？俺どうなの？」

「マイペースな奴じゃな、えーっと簡単に言っと」

自称神様はスウ、と息を吸って

「転生」

「おっしゃー、じゃあさっさとしろ」

「あれ？驚いて？もつと驚いて？わしはお前が不幸すぎてあまりにも不憫だから転生させてやるうって言うのに」

うっせばーか、これは夢なんだ、だしたらこんな馬鹿らしい夢なんか見てられっか

あれ？これが俺の夢だとしたらこの夢を作り出している俺は馬鹿ってことだよな？

・・・まあ、いい

「いやどうでもいいからさっさとしろ髭オヤジ、いい加減怒りますわよ」

「落ちろ」

自称神様がそう言った瞬間

俺の目の前が真っ暗になった

なんだよ、真っ白になったり真っ暗になったり

まあいいか、これで夢が覚めて現実世界に帰れるんだから・・・

そのまま俺の意識は闇へと落ちていった

第1話 無人島

「・・・ハッ！！」

目を覚ました

俺の予想していたものは、消毒液の香りと、白い天井
だが実際は違った

俺は仰向けに倒れていて、目に映るのは青い空、肌を感じるのは草
の感触

近くで水の流れる音が聞こえる

そうだ、まるで自然の中に放りだされたような・・・

これが転生というやつだとしたら、もし本当に転生だとしたら
神様は俺をここに放り出したことになる

一つ言わせてもらおう

ふざけんなチクシヨウ

『目を覚ましたようじゃな』

忌々しいクソオヤジの声

『手短に言っぞ、お前は今ONEPIECEの世界にいる。そんで
お前の近くに悪魔の実があるからそれを食べ、名前はムキムキの実
で、この世の向き・・・お前にはベクトルと言った方が早いかの、
それを操れる。それとわしの情けで3歳にしておいた、感謝せい。
んじゃ』

軽い、軽すぎる

神様がんじゃ、とか言ってこんな自然に3歳の子供を放置するなん
て想像できるだろうか

少なくとも俺は今体験するまで想像できなかつた

それとここがONEPIECEの世界だとかそーいうのはもういい
吹っ切れた

そーいえば神様はムキムキの実があるとか言ってたな

能力がまんま一方通行、最強であり、最凶である

最初ムキムキの実と聞いた時は体に筋肉が凄くついて、ムキムキになるかと思った

そうだとしたら俺は神様を一生恨む事になっただろう
ひとまず立ち上がるか・・・と

上半身を起こして立ち上がるうとすると

コッソ、と

「いてっ!!」

額になにかぶつかった

痛む額を押さえながらもぶつかった対象を見ると

何か毒々しい実があった

この時、俺は瞬時に理解した

これは悪魔の実だ、と

確か悪魔の実はこの世の終わりを感ずるほど不味かつたはずだ、それを進んで口にしようとは思わない

・・・ふむ

俺は悪魔の実を手にとって、水場に移動する

さらば、俺の味覚よ、しばし旅に出てもらおう

「いざ!!」

一口

もぐもぐもぐもぐ・・・ゴクン

うん

「死ぬ」

それだけ言つて俺は水を飲みまくつた

なにこれ!? 食うもんじゃねえよ!! こんな不味いモン食つたこと
ねえ!!

「ぶはあっ!!」

そのまま後ろに倒れこむ

ま、まあ、これで俺は悪魔の実の能力者になつたはずだ、それもこの世のベクトルを操る能力を

扱いは難しいだろうが、この数年でなれていけばいい

・・・今思った

食料は？

見たところここは無入島なみたいだし、食べ物はどうすればいいんだろう

ガサツと

突然草むらの方から音がなった

「まさかここで虎とかなんか出てきて、俺が襲われるなんてパターンにはならないだろうな」

わざと口に出して言ってみる

瞬間

立派な爪と牙を持った虎が襲い掛かってきた

「まじかよっ!?!」

突然のことなので目をふさいでしまう

さらば、俺の第二人生、1時間もせずには終わってしまったよ・・・
きつともうすぐ目の前は赤い血で染まるに違いない

・・・あれ？

全然痛くない

恐る恐る目を開けてみると、目の前には牙と爪の折れた虎がいた

・・・ああ

反射ね

どうやら俺もデフォルトで反射設定が働いてるみたいだったたら

「てい」

虎に一発ぶち込む

顎に俺の拳が突き刺さり、軽く数m吹っ飛ぶ

わけもなく、運動量のベクトルを虎に向けただけで、3歳程度の腕力ではそうも吹っ飛ばない

ただ、俺の反射膜に触れて折れた牙と爪、あと残ってるのはぷにぷにの肉球と大きな体

・・・ふむこいつ

食えるだろうか？

「いやいやいや！！ダメだ！！魚とかは全然OKだけど流石に虎はダメ！！無理だよ！！」

などと俺が1人（といってもすぐそばに一匹いるが）で叫んでいるとズブツ、という音がした

思わず虎の方を見るとさっき折れた牙と爪が元通りになっているではないか

何だこの虎、よく見たら毛白いし

てか再生早すぎじゃね！？絶対普通じゃない！！

「全く、触れようとしたら牙と爪が折れるなんて何てチートよ？」

「は？」

なにやら

目の前にいる白い虎さんが人語を話している

それもその姿に似合わない高い女みたいな声で

・・・ハハツ、有り得ない、虎が喋るなんて有り得るわけがない

そうだ、んなこと有り得ねえ

・・・いや、この世界なら有り得るか？

悪魔の実、そうだ悪魔の実がある

ヒトヒトの実をこの虎が食った、ってことか？

だとしたら無駄な再生機能はどういうこと？デフォなの？

俺が下に向けている視線を再び虎に向けると

そこには、白い肌で、金髪、金色の瞳の3歳ぐらいの女の子がいた

・・・あーそうか

悪魔の実を食ったのは間違いない、だが虎が人の言葉を喋れるようになったんじゃないかと、人が虎になれるようになったんだ

はっはっは、そういうことか

ひとまず、この状況をどうにかしなければ

勘のいい方はお分かりだろう、そうだ、さっき俺が目にした虎は服なんて着てなかった

そこから人の姿に戻れば、どうなる？

答えは一つ

そう、俺の目の前にいる彼女はこの場では表現してはいけない姿なのだ

率直にいいますと、素っ裸である

でも俺は精神年齢高校生、幼女の裸なんざ見て興奮なんかするわけがない

だが、どういうことか体温が上がっていく感じがする

辿り着く答えは二つ、俺の心は3歳に戻ってしまったか、もう一つは俺にロリコンの気があるか

「いつやああああ！！？それはねえ！！てかなんて格好してんだお前！？」

「んー？別に気にすることないじゃん？」

「何で！？最近の子って何でこんなに大胆なの！？いやもうこれは大胆の域を越してる！いいから取り敢えず服を着なさい！！」

「何でそんな慌てるの？いいじゃない、同じ女の子なんだし」

「・・・へ？」

今、なんつったこいつ？

俺が女の子？有り得ない、だって下半身にすっかり前世で慣れ親しんだモノがあるし、俺は男だ

だとしたら・・・

俺は水場まで弾丸のような速度で走っていった、てか飛んだそして水面に自分を映し、顔を確認する

・・・ああ、無理ねえわ

だって女みてえな顔してんもん

髪と肌は白くて、瞳は黒く、少し大きな目、整った顔立ち

いやさ、幼かったら女の子と見間違える事はあると思う、仕方ないけどそんな事関係なしに百人に聞いて百人が「女の子」と答えるほど俺は可愛かった

自分で言うのも気持ち悪いが、許してほしい

「・・・マジ？」

「ちょっとー何もの凄い速さで逃げてんの？」

「えーっと・・・大変申し上げにくいのですが・・・」
もういい、本当のことを告げよう

「俺は、男」

「・・・え？」

「何なら今ここで下半身晒してもいいんだぜ？」

俺がセクハラギリギリ（っていうかセクハラ）の発言をすると

彼女の顔が驚愕の色から、段々と赤くなっていった、最終的にリン
ゴみたいに真っ赤になった

それと同時に、彼女は俺に鋭い拳を放ってきたのである

「あぶねっ！俺がじゃなくてお前が危ない！」

「ええーい！！向こう向け！！こっち見んなー！！」

「悪かったって！！悪かったから俺に触れようとすんなお前が怪我
する！！」

こうして

他に誰もいない島で3歳の子供2人が騒ぐというなんとも不思議な
光景があった

ここが、俺の新しい人生の始まり

第2話 修行

うん、危ないから反射切ろうと思ったらできたよ

というわけで白髪の女の子みたいな少年です、名前はまだない

今彼女は悪魔の実の能力で半人半虎になっている

だから女性としての大事な部分はしっかり隠されている、白い毛で色々和不味い気もするが彼女は服を持ってないらしい、そもそも何でこんな子供がこんなところに？

と聞いてみると「気がついたらここにいた」らしい

これを聞いた瞬間に嫌な予感がした

だってね？俺も気がついたらここにいたんだよ？

だとしたら、彼女も転生者なのではないか？

「もしかして、お前も転生者？」

「お前もってことはアンタも？」

どうやら彼女は転生者なみたいだ

決めた、俺はこの島を転生の島と呼ぼう

「はぁ・・・アンタもねえ・・・でもびっくりするわよね。いきなり山に放り出されるんだから」

え？山？

今山って言いました？

「ここ、山なの？」

「そうよ、山。木登ってみなさいよ、下に村が見えるから」

俺は言われた通りに木を、登らなかつた

だってベクトル操作で飛べるんだもん、登る必要がない

俺は爆発的な勢いで飛んで、周りを見渡す

すると下の方に村があった、ふむ、ここは転生の山か

俺は地面に安全に着地して

「取り敢えず下りてみるか？えーっと・・・」

「そっぴや名前、無いわね」

うーん・・・名前、ねえ

「じゃあ前世の名前で、私はリナ、アンタは？」
前世の名前・・・だと？」

正直嫌だ、だってダサイ、小学生辺りになんだ俺の名前だせえみた
いなこと思っただもん

言いたくない・・・でも今すぐ名前考えろって言われたって・・・
・・・よし、正直に言おう

「・・・ライト」

「っしやライト、行くわよ！」

ありやスルー？スルーなのね？別にいいざますよ
こうして俺と彼女・・・リナは山を下りていった

・・・なんてこった

原作知識はあんまりないけど、確かにここはルフィの故郷
フリーシャ村だ

「・・・フリーシャ村かー」

「何？アンタここ知ってんの？」

「ん？お前ONE PIECE知らねえのか？」

「知らない、ここに来る前に何かのアニメの世界って聞かされただ
け」

ふむ、知らないのか

だとしたら悪魔の実を食べた瞬間びっくりしただろうなー

だってこの世界のこと知らないんだから、クソ不味いモン食って虎
に変身できたんだから

取り敢えず村長さん・・・てカルフィ探そう

いや、ここは・・・会っていいのだろうか？

俺はここにいてもつまらないから海に出るつもりだし、山にこもっ
て修行の方がいいのではないか？

それに・・・その・・・能力暴走しちゃったら何だし、しっかり実
力つけてから村に下りるか

「リナ」

「？」

可愛らしく小首を傾げ俺の方を見てくる

「俺は山に戻る。リナはどうする？」

「何で!？」

俺はさつき思ったことを説明した

あれ？俺なんかヘタレみたいになってる、いや俺はヘタレか
話し終わるとリナは少し考えてから

「・・・私もついてく、1人じゃ心細いし」

ありゃ、結構可愛いとこあんじゃない

俺は少し笑ってありがとう、と言っておいた

折角目の前に安全に過ごせる環境があるにも関わらず俺達は再び山
に入っただけだった

とはいっても

ベクトル操作なんてものは結構簡単だったりした

ベクトルの計算式なんて必要なく、ただ『地面にヒビを入れる』と
イメージするだけで勝手に能力が働く

高電離気体、プラズマもそうだ

プラズマってのは超高温の気体では原子核と電子の結合が維持でき
なくなり、原子が陽イオンと電子に分解してしまうそれによって生
じた電子と陽イオンからなる気体をプラズマってんだけど、『プラ
ズマを作る』ってイメージしたら出来た

その際、もの凄い暴風が吹き荒れたけど気にしない

風も手に取るように操れるんだからこの能力チートすぎる

地震も起こせたりしちゃうもの、凄いよこれ

「ライトの能力って本当に滅茶苦茶よね。同じ悪魔の実の能力者な
のに私のが霞んで見えちゃう」

「鍛えようによってはリナも強くなるだろ。俺のは元々がチート過
ぎるだけだ」

今思ったけどムキムキの実って超人系？リナのはネコネコの実モデル虎みたいな動物系ソオンだろうし、俺のは自然系ロギアじゃないよな？

だとしたら超人系パラミシアだな、決定

でも確か反射には弱点があったよな、確か反射膜に触れた瞬間拳を引いて、ベクトルを逆転させるみたいなの・・・

後それと関係なく強すぎる攻撃は反射しきれなかったり

・・・まあ考えても仕方ない

「そついやリナって海に出る気あるか？」

「海？あー、さっき聞いた話じゃ今って大海賊時代なんだっけ？」

3歳の子供が何話してんだって思ってるだろうけど、気にしないで

「俺は海に出ようと思ってる、んで海賊王とは行かなくても世界に名を轟かせるような海賊になりたい」

「・・・で、私にどうしろって？」

察し悪い、何で？分らない？

「だから、海に出る時着いてきて欲しい」

そつだよ、着いてきて欲しいんだよ

ここで会ったのも同じ転生者なのも安心できるし、俺としては最初の仲間として申し分ない

ルフィは海賊王になる！！とか言ってたけど、俺は別にそこまで目指してない

海賊王なんざ自分から死ににいつてるようなモンだ、だったら海賊王は目指さなくていい

「・・・んー、どうしよつかない」

「分かった、なら後4年、俺達が7歳になる時に村に降りる、その時に答えを聞かせてくれ」

「何そのプロポーズみたいなの、まあいいわ、OK」

4年後

そう、確かルフィが7歳の時に原作は始まったはずだ

あの神様からルフィと近い歳にしといたって聞いたし、俺達も7歳になったら村に降りればいい

それまで修行だ

第3話 遭遇

さて、と

問題が起きた

住居は問題なかった、俺の能力があればそこら辺の木を切って建てれる、簡単だ

問題は寝る時

当然毛布なんてものは持ってないので、4年間冷え込む時もあるだろう

寒さで死んじゃう

・・・なんてことも問題ない、俺の能力は冷気も反射できた
だったら何が問題かって？そりゃあ・・・

食べ物

こんな山なら動物の一匹や二匹はいるだろうと思っただが、生憎俺は調理の仕方なんて知らない

ただ肉を焼けばいいんじゃないかね？とか思う人もいるだろうが、何しろ野生の動物は危険がいっぱい

そしてこの世界のことだ、知らず知らずの内に毒を食ってましたなんてことは有り得る

俺達の目の前には焼かれた動物の肉、腹が減ってる今もの凄く食欲をそそるものだが・・・

「さて、どうする？」

と、俺がリナの方を見ると

虎さんがいた

そしてそのまま焼かれた肉にがぶり・・・と

「虎になつた意味あんの？」

一言

なぜ虎になつた、と問うと

「気持ち？」

だよ

様子からするとこの肉は食べても大丈夫そうだ

何？最初から食ったときゃよかつたんだって？俺はヘタレなんだよ

（肉食し中）

「いや、3歳にこの量はきつい・・・」

「流石にね、それにしてもライト、食べすぎでしょ？」

そうだ、リナが5分の1食べたとしたら、俺は5分の4

流石に食べ過ぎたか、明日も明後日もいらぬような気がする

ちなみに今は夜、リナは肌寒さを感じるのだろうか？俺は冷気を反

射、熱気をも反射してるから分からない

そんで今何月？暑いか寒いかもわからない

とかこれから4年間過ごす家の中で考えてるんだが、寝ながら

・・・あー、

それよりもすぐ隣でリナが寝ているのが気になる

前も言った気がするが俺は精神年齢高校生、なはず

それか精神年齢3歳かもしれない、だとしたら俺はロリコンじゃない

い、希望はある

海についてきてくれるとしたらリナも当然成長するし、その時に俺

が恥じらいを持っていたら完璧にロリコンじゃない！！

・・・なんで俺は自分のロリコン疑惑を解消させようとしてるんだ

・

「寝よ」

俺は静かに目を閉じて眠りに落ちるのだった

4年後

おい作者、大したイベントがなかったからってすぐに4年経ったことにするな

・・・ま、それは置いといて

「何か名残惜しいわねー」

俺達の目の前には4年間過ごした家がある

「そうだな・・・思えばここが新しい人生の始まりだったんだし・・・」
でも仕方ない、村に降りるしかない
「行くか」
それだけ言つと俺達は村に降りていった

さて、どういうことだろうか

確か原作ではフーシャ村にシャンクスは1年間くらいいたんだよな
だとしたらルフィが6歳の時にシャンクスが来たことになる

・・・ふむ、ならば

俺達はルフィより一個年上ということか

説明しよう！俺達が村に降りると今シャンクスがフーシャ村に着いたばかりなのである！

「取り敢えずあそこまで行くか」

「悪い海賊じゃないのよね？」

首を縦に振って肯定すると、リナは後ろをついてきた

・・・それにしても

7歳になるだけで大分可愛くなってる、いやまじで

髪は切ることがなかったから自然と肩の辺りまで伸びていて、風呂にも入って体のケアはちゃんとしてたから金色の髪が艶やかに光っている

可愛いというより綺麗、かな？

絶対将来美人になるん

ゲフンゲフン

何か俺危ない方向に進んでる気がする

俺と言えば、肩より少し上まで伸びた白い髪に、可愛かった顔には少しずつ男の面影が見えてきたところだ

でも現段階ではまだ女の子と間違えられるだろう、リナに間違えられたように

・・・まだ港の方にいるな、ルフィらしき子供もいたけど、スルー

先にマキノさんに会いに行く

すぐに酒場にくるだろうし、マキノさんのところに行ついたら自然と会えるだろう

俺達が酒場に入ると、マキノさんしかいなかった

そりゃな、今お昼だし、いやでもここなら昼にきててもおかしくないか？

だとすると、海賊を見に行つてたり・・・
考えてもしゃーない

「あら、見ない子ね。どこからきたの？」

リナの方をチラツツと見る

・・・金色の瞳が語っている、任せた、と

リナから視線をはずしてマキノさんの方を再び見て

「山からです」

言った

マキノさんからした俺達の第1印象、変な子達

あれ、悲しい、何かもの凄く悲しいぞ

「・・・細かいことは気にしないでください、ていうか聞かないで、俺達が変わな子になっちゃう」

俺が勝手にしょんぼりしながら言うと

「ライトに任せた私が馬鹿だった・・・私の名前はリナ、こっちはライト、しばらくこの村にいる予定だからよろしく」

最初からリナがやってくれたらよかったのに、俺が滅茶苦茶馬鹿なヤツみたいになつたじゃねえか

実際馬鹿だけど

「え？ああ、私はマキノ、よろしく」

マキノさんは笑顔で言うてくださった、それが作り笑いだとしてももの凄く嬉しい

・・・ハッ！！

そうだ忘れてた

「俺達住む場所がないんですよ。だからできればここで働かせても

らいたいんですが・・・」

ここで生じるのが子供に任せることの心配、どうせ酒瓶を割るなんて思ってるんだろう

そんなモンあるわけない、ベクトル操作してりゃ落とすことなんざまずないんだから

「でもねえ・・・」

「掃除とかなら滅茶苦茶自信あります、塵一つ残しません」

俺がキリツとした（実際キリツとしてるかは分からない）表情で言う

バン！！と後ろの扉が開いた

そう、かの赤髪のシャンクスである

・・・俺達が7歳だからか、異常にでかく見える

そしてその隣にはちっちゃい男の子、モンキー・D・ルフィがいた

「ん？誰だ？お前等？」

ルフィが最初に口を開いた、そりゃそうだ、見知らぬ顔が二つもあるんだから

「何だ？このお嬢ちゃん達、友達じゃないのか？」

ピクッ

な、何？この赤髪さん、何て言いやがりました？

リナは必死に笑いをこらえている、ち、チクシヨウ

「・・・ちよつと、その赤髪が素敵なお兄さん」

「？」

分かってる、俺が悪いんだ、こんな顔立ちだから

でもさ、流石に怒っちゃう、俺って男の子だもん

「・・・俺、男です」

シャンクスから見た俺の第1印象

女の子

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8883z/>

ONEPIECE 白髪の男

2011年12月29日10時53分発行